承認 '71.9.10
校正
作成
仕様 S 711992

PAC 55−2形
可変直流定電圧定電流電源

取扱説明書

菊水電子工業株式会社

― 保証 ―

この製品は、菊水電子工業株式会社の厳密な試験・検査を経て、その性能が規格を満足していることが確認され、お届けされております。

弊社製品は、お買上げ日より１年間に発生した故障については、無償で修理いたします。但し、次の場合には有償で修理させていただきます。

1. 取扱説明書に対して誤ったご使用および使用上の不注意による故障・損傷。
2. 不適当な改造・調整・修理による故障および損傷。
3. 天災・火災・その他外部要因による故障および損傷。

なお、この保証は日本国内に限り有効です。

― お願い ―

修理・点検・調整を依頼される前に、取扱説明書をもう一度お読みになった上で再度点検していただき、なお不明な点や異常がありましたら、お買上げもとまたは当社営業所にお問い合せください。

目　次

1. 概　説 3

2. 仕　様 4

3. 使用法 6
  3.1 パネル面および後面パネルの説明 6
  3.2 使用上の注意 8
  3.3 サンプリング端子の使用方法 9
  3.4 定電圧・定電流特性について 11
  3.5 過渡応答について 11
  3.6 単独運転 12
  3.7 直列運転 13
  3.8 並列運転 15
  3.9 ワンコントロール並列運転 16
  3.10 リモートコントロール 17

4. 動作原理 20
  4.1 概　要 20
  4.2 回路の詳細な説明 22

5. 調整要領 27
  5.1 最大出力電圧の調整 27
  5.2 最大出力電流の調整 27
  5.3 リレー切換電圧の調整 27

＊ 回路図

菊水電子工業株式会社 取扱説明書書式
承認
校正
NP-32635 B 7105100・50 SK 11
作成
年月日
仕様番号

1.　概　　説

菊水電子PAC55－2形はすぐれた変動率，低い温度係数，速い過渡応答を有し，回路はすべてシリコントランジスタ化された信頼性の高い可変直流定電圧定電流電源でアナログ，デイジタル両回路に使用できるユニバーサル型の電源です。

出力電圧は10回転の　可変抵抗器を使用して，0～55Vを微細でスムーズに可変することができます。出力の電流容量は最大2Aで0.05A～2Aの間を定電流電源として使用できます。

定電流特性は新回路方式（実用新案出願）を採用しているため従来のものと比べて大幅に改善されています。

定電圧，定電流動作は負荷の状態によって自動的に切り変わる定電圧，定電流自動移行形でパネル面には，これらの動作領域（定電圧，定電流）を表示するランプがあり動作領域を容易に知ることができます。

また，単独運転のみならず直，並列運転，ワンコントロール並列運転による電圧，電流の拡大を行なうことができます。さらに外部抵抗による出力電圧制御（リモートコントロール）も行なうことができます。

37B05
△ 79.2.15 [illegible]
5回転→10回転

2. 仕様

入力電源		100V AC ± 10%, 50/60Hz	
	全負荷		約250 VA
寸法		210W × 140H × 310D㎜*	
	最大部	215W × 165H × 353D㎜	
重量			約9 kg
周囲温度			0 ～ 40℃
付属品		ショートバー	1
		[illegible]	1
		普通形2Aヒューズ	2
		取扱説明書	1
		[illegible]	1
端子		色別水平配置19㎜間隔－，GND，＋および（後面端子にて）－サンプリング・－，GND・＋・＋サンプリング，出力の入断を行なう出力スイッチ内蔵	
極性			正または負
対接地電圧			最大±250V

定電圧特性

電圧	10回転連続可変	0～55V
電流		2A
リップル・ノイズ（5Hz ～ 1MHz）		500μV rms

電圧安定度

電源変動	電源電圧100V±10%に対して 0.005% + 1mV
負荷変動	負荷電流の 0 ～ 100%に対して 0.005% + 1mV

過渡応答時間（10 ～ 100%）	標準値	100μS
温度係数	標準値	100 PPM/℃

△79.5.9

回転→10回転

定電流特性

電圧	10回転連続可変	0 ～ 55V
電流		0.05 ～ 2A
リップル・ノイズ	（5Hz ～ 1MHz）	1mArms

電流安定度

電源変動	電源電圧100V±10%に対して	1mA
負荷変動	出力電圧の 0 ～ 100%に対して	3mA

運転　　直列接続
並列接続
ワンコントロール並列運転
出力電圧リモートコントロール

定電圧．定電流動作表示

発光ダイオードにて表示
定電圧 ……………… C・V
定電流 ……………… C・C

電圧計	DC 60V	確度 フルスケールの2.5%
電流計	DC 2.5A	確度 フルスケールの2.5%

＊ ラックマウントフレームRMF41．RMF42にて標準ラックに2台ならべて取付可能

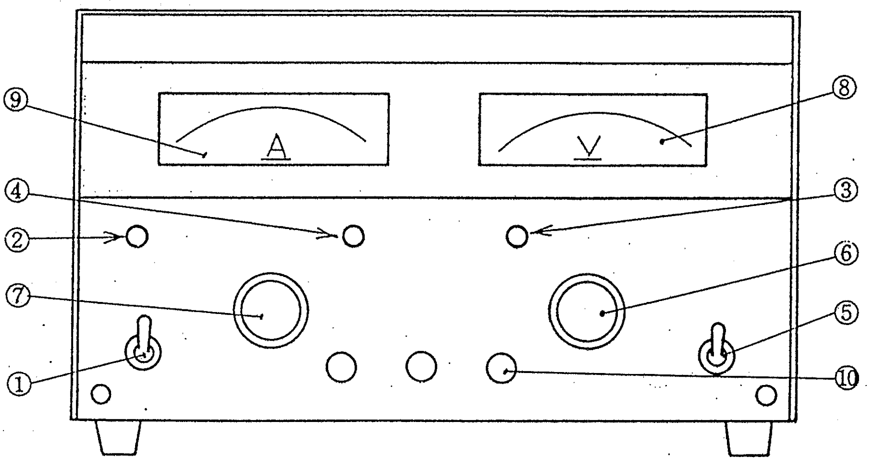
過電圧，または過電流保護装置（別売り）取付可能

3. 使　用　法

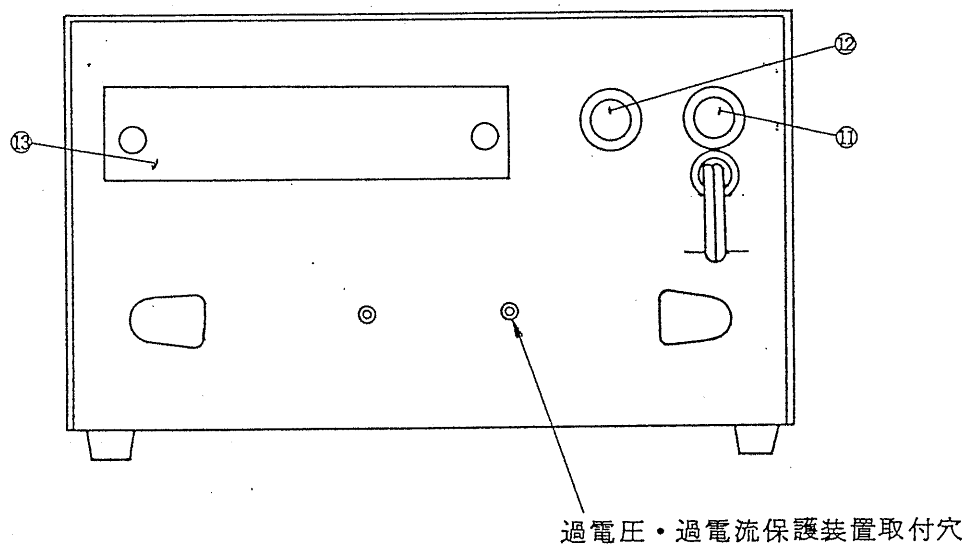
3.1 パネル面および後面パネルの説明（第3－1図，第3－2図を参照して下さい）

①	電源スイッチ	入力電源の入断を行うスイッチで，上に倒すことによって電源が入ります。
②	パイロットランプ	入力電源の入断を表示するランプで，電源が入ると点灯します。
③	定電圧表示ランプ	本機が定電圧領域で動作していることを表示します。
④	定電流表示ランプ	本機が定電流領域で動作していることを表示します。
⑤	出力スイッチ	出力の入断を行なうスイッチで，出力と負荷をこのスイッチで切離します。
⑥	電圧設定ツマミ	出力電圧の設定を行なうツマミで，時計方向で出力電圧は高くなります。
⑦	電流設定ツマミ	出力電流の設定を行なうツマミで，時計方向で出力電流の設定は大きくなります。
⑧	電圧計	出力電圧を指示する電圧計です。 DC　60V　確度は，フルスケールの2.5％
⑨	電流計	出力電流を指示する電流計です。 DC　2.5A　確度は，フルスケールの2.5％

⑩ 出力端子	本機の出力を取り出す端子で，左よりマイナス(白)，GND(黒)，プラス(赤)と１９㎜間隔で配列してあります。
⑪ 入力ヒューズ	電源トランスの１次側に挿入されたヒューズで故障時，本機を二次的損傷から防ぎます。遅断形４Ａ
⑫ 出力ヒューズ	出力側に挿入されたヒューズで本機が故障した場合，接続された機器に過大の電流が流れ破壊されるのを防ぎます。普通形２Ａ
⑬ 後面端子板	出力端子，サンプリング端子，リモートコントロール用端子，ワンコントロール並列運転用端子があります。



第３－１図　前面パネル



第３−２図　後面パネル

3.2　使用上の注意

本機を使用するにあたって必ず次のことを守って下さい。

(1)　入力電源について

入力電源は電圧が１００V　AC ± １０％で周波数が４８ 〜 ６２Hzの範囲内で使用して下さい。

(2)　設置場所の注意

- 他の熱源から輻射を受ける場所
- 周囲温度が０ 〜 ４０ ℃以外の場所
- 多湿度，ほこりの多い場所
- 下が平らでない場所で使用しないで下さい。
  また，本機を横にしたり上に物を置いて使用すると十分な放熱効果が得られず故障の原因となりますので絶対にさけて下さい。

(4)　オーバーシュートについて

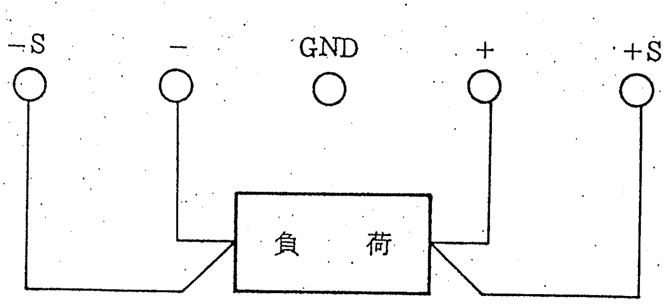
本機は電源のON－OFFのいかなる場合にも，出力電圧が設定電圧よりも大きくなることはありません。

3.3　サンプリング端子の使用方法

本機と負荷が離れていて，出力端子と負荷を接続するリード線が長くなるとリード線の抵抗による電圧降下が生じ負荷変動が増加します。この場合，後面端子のサンプリング端子を使用して，この増加を防ぐことができます。接続図は第3－3図を参照して下さい。

(1)　後面端子の1－2，4－5の間のジャンパー線をはずします。

(2)　後面，もしくは前面の出力端子に負荷を接続し，負荷の接続点に最も近い所，（または，安定化したい所）にサンプリングの線を接続します。
注意：サンプリング端子の極性は出力端子の極性と同じにします。



第3－3図

注）1. 負荷変動の増加分は，次のようにして計算できます。
負荷電流Io（A）リード線の抵抗R(mΩ)とすると電圧降下Vd(mV)は

$$Vd(mV) = Io(A) \times R(m\Omega)$$

注）2. サンプリングに用いる線は2芯シールド線を用いると誘導を受けにくく，リップルの悪化を防ぐことができます。サンプリングリードの極性に注意。

注）3. 負荷のリード線の抵抗によって定電流の設定値がずれますから注意して下さい。

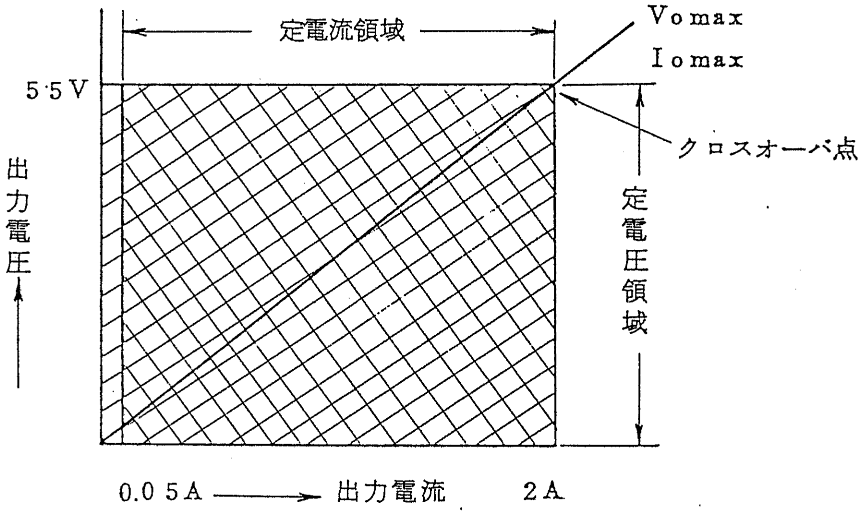
注）4. サンプリングの線が長くなると発振を起しやすくなりますので，サンプリング点に容量が数μF，耐圧63V以上の電解コンデンサを，極性を同じにして接続して下さい。

注）5. 負荷接続線の電圧降下が0.3V以上になるとサンプリング動作が効かなくなります。

3.4　定電圧・定電流特性について

本機の出力動作特性は定電圧・定電流自動移行形と呼ばれ，負荷が零から無限大まで変っても，定電流動作領域から定電圧動作領域までの変化が連続的に行なわれます。

定電圧動作領域から定電流動作領域の交叉点はクロスオーバ点と呼ばれ，これらと負荷の関係を図示すると第３−４図のようになります。



第３−４図

斜線の部分が本機の動作領域で，この領域内のどの点でも動作は可能です。

3.5　過渡応答について

本機は過渡的な応答にも十分速く応答するように設計されていますので，ディジタル回路のように負荷が急変し，かつ過渡的な変動が問題になるような回路にも使用できます。しかしこれはあくまで出力端子での特性であり負荷までの線が長くなる場合は，線路のインダクタンスの影響が無視できなくなります。このような時は，線路間にコンデンサを入れインダクタンスを打ち消すようにして下さい。

3.6　単独運転

定電圧動作

1）電源コードを接続し，電源スイッチを上方に倒します。パイロットランプが点灯し，ただちに動作状態に入ります。

2）CURRENTツマミを時計方向一杯に廻しておきます。この状態でVOLTAGEのツマミを廻して希望する電圧にセットします。（時計方向で出力電圧は大きくなる。

3）出力スイッチを下方に倒しておき，出力端子に負荷を接続します。

4）出力スイッチを上方に倒すと出力と負荷が接続されます。

注）もし負荷電流をある値に制限したい場合は，2）の後に出力スイッチを上方に倒し，出力端子間を短絡しCURRENT ツマミで希望の電流値にセットします。

定電流動作

1）定電圧動作，1と同じ。

2）VOLTAGEツマミを時計方向に廻し，回転が止まるまで廻します。（最大出力電圧）

3）出力スイッチを上方に倒しておき，出力端子を短絡し，希望する電流値にCURRENT ツマミを廻してセットします。（時計方向で出力電流は大きくなります。）

4）定電圧動作3に同じ。

5）定電圧動作4に同じ。

注） 1. 本機は，定電圧，定電流自動移行形ですから負荷の値が大きくなってくると，ある電圧で定電流領域から定電圧領域に入ります。
従って，負荷にかかる電圧をある値に制限したい場合は，2において，出力電圧をその希望する電圧値にあらかじめセットしておいて下さい。

注） 2. 定電圧，定電流の動作領域は，パネル面のランプに表示されます。

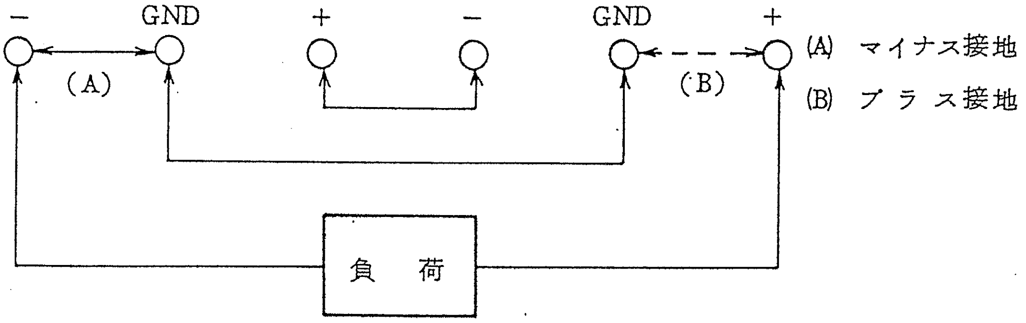
定電流動作……………………………C·C
定電圧動作……………………………C·V

注） 3. サンプリング端子を用いる場合はサンプリング端子の使用方法注）3を参照して下さい。

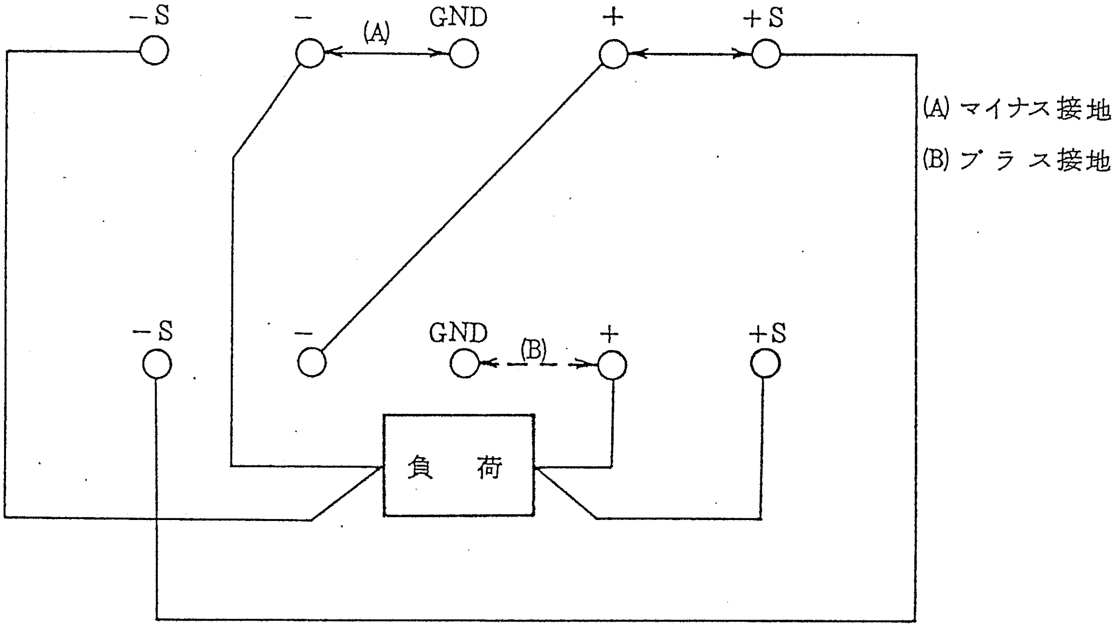
3.7 直列運転

本機の定格出力電圧以上を利用したい場合，出力端子を直列に接続して電圧を高くすることができます。

注） 1. 2台の異なる端子が接地されないよう，注意して下さい。
注） 2. 出力の端子電圧が対接地電圧を越えないよう注意して下さい。
注） 3. 他機種との直列運転は避けて下さい。

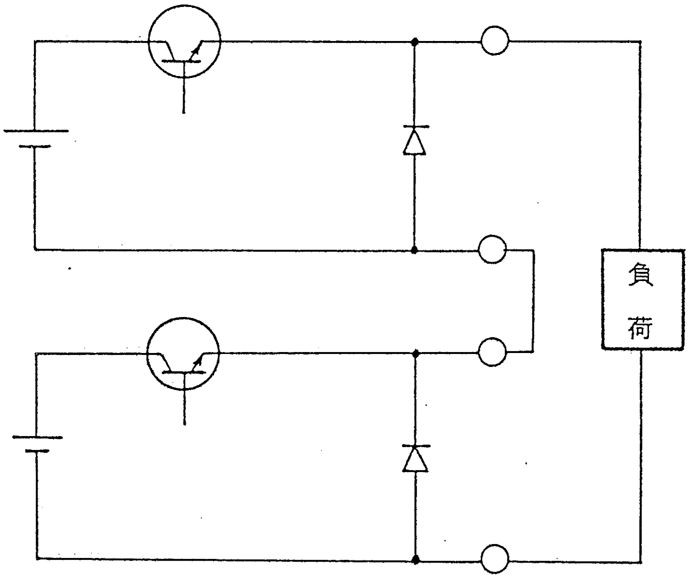


第3－5図　直列運転接続図


−S
−
(A)
GND
+
+S
(A) マイナス接地
(B) プラス接地
−S
−
GND
(B)
+
+S
負　荷

第３−６図　直列運転サンプリング端子接続図

このような運転において過負荷となった場合，定電流領域に先に入った方の機器に他の機器の出力電圧が逆方向に加わり前者の直列トランジスタが破壊されます。これを防止するため，出力端子間にダイオードが接続されています。特許　308280号（第３−７図参照）



第３−７図

菊水電子工業株式会社　取扱説明書書式
承認
校正
作成　年月日
仕様番号　S－712006

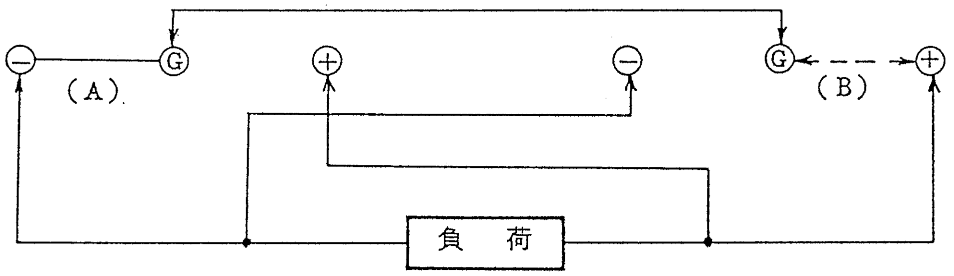
3.8　並列運転

本機の出力端子を単に並列に接続するだけで定格以上の電流を取り出すことができます。

1）並列運転する機器の出力電圧を使用する電圧にできるだけ近づけてセットします。（各機器の設定差がそのまま負荷変動になるため。）

2）CURRENTツマミを時計方向一杯に廻しておきます。

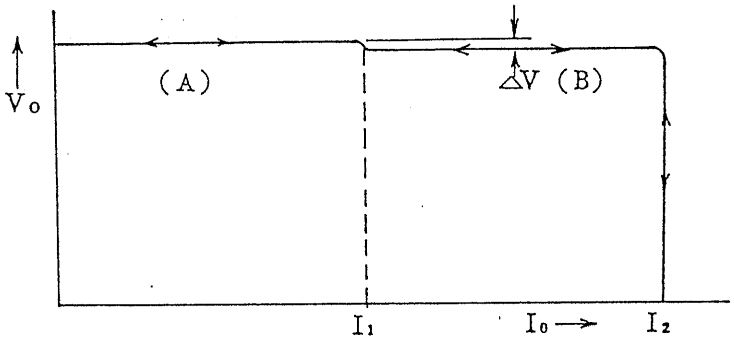
3）各出力の極性を同じくして接続し，負荷を接続します。（この場合各機器の接地の極性は，同じにして下さい。）



第3－8図　並列運転接続図　(A)　マイナス接地
(B)　プラス接地

並列運転における電圧・電流特性

並列運転における電圧電流特性は，第3－9図に示すように出力電圧の高い機器Aが過負荷になるまで動作し，定電流領域に入ると出力電圧が降下し，他の機器Bの設定値に達すると今までB機の出力端子は逆方向電圧状態から，正常になり，定電圧動作に移ります。このため負荷変動は，設定電圧の差△Vとなり，リップル等の特性も悪くなります。



第3−9図 特性図

3.9 ワンコントロール並列運転

ワンコントロール並列運転は，並列運転の様な悪い特性がなく，かつ定格電流以上の電流を使用したい場合に使用します。

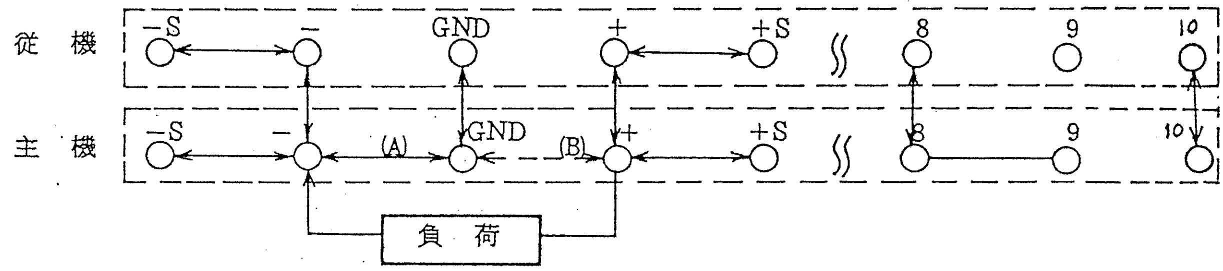
1) 主機（出力電圧を可変する機器）と従機（主機により電圧をコントロールされる機器）の後面端子を第３−１０図のように接続します。

2) 出力を主機の後面出力端子から取り出します。ただし，電源および出力スイッチは主機，従機の順で投入し，従機，主機の順で切断して下さい。

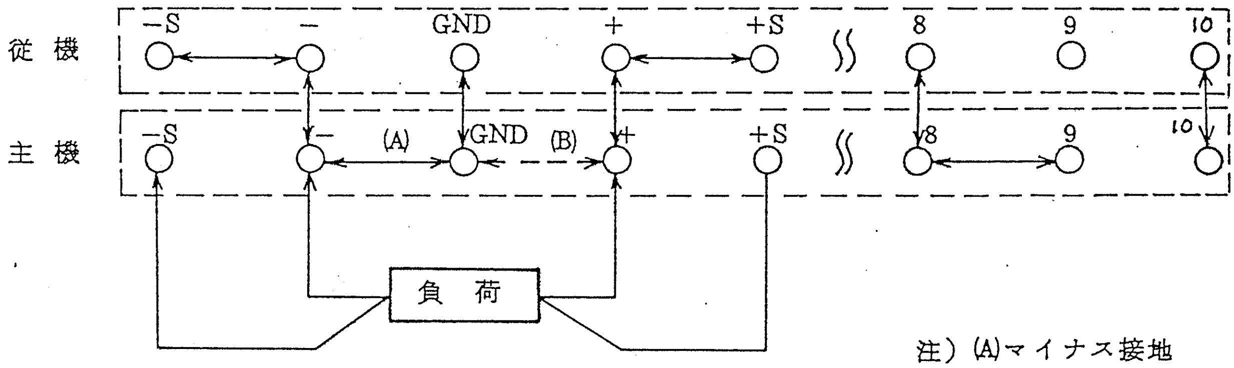
注）1. 前面からの出力端子から取り出す場合は多少負荷変動が悪くなります。また主機，従機の電流のバランスも悪くなります。

注）2. 負荷変動の増加を防ぎたい場合は，サンプリング端子を使用して下さい。接続図は第３−１１図を参照して下さい。

注）3. 従機のVOLTAGE CURRENTのツマミは時計方向一杯にしておきます。



第３－１０図　ワンコントロール並列運転



注）(A)マイナス接地
(B)プラス接地

第３－１１図　ワンコントロールでサンプリング端子を使用する場合

3.10　リモートコントロール

本機と離れて出力電圧可変を行ないたい時，また出力電圧可変の分解能を上げたい時，また，前もって設定された出力電圧をスイッチ等の操作のみによって種々得たい時は，本機の後面端子のリモートコントロール用端子を使用します。

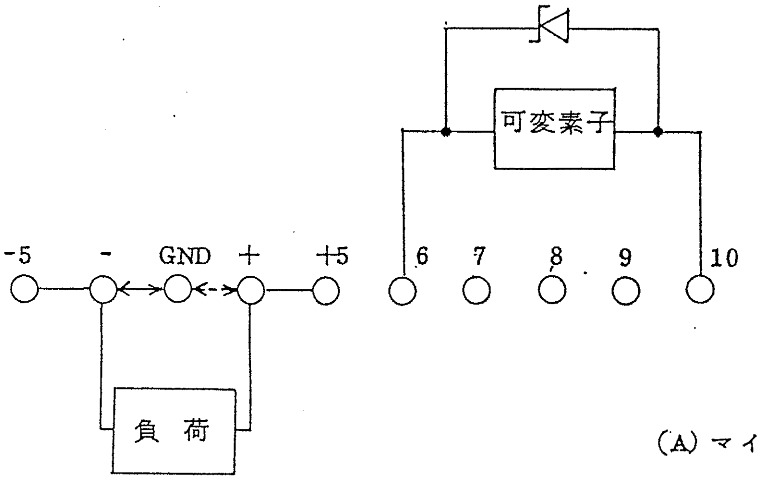
1）電源スイッチをＯＦＦにしてから後面端子⑥－⑦のジャンパー線をはずします。

2）⑥と⑩間に希望する用途に合わせた可変素子を接続します。

注）可変素子については後述します。

3）電源スイッチをＯＮにすると，出力電圧は接続された可変素子の特性に従って変化します。

注意：可変素子に接続する線が開放になると出力電圧の制御が不可能になり，過大出力電圧が出ますので配線は必ず電源を切った状態で行なって下さい。



(A) マイナス接地
(B) プラス接地

第３−１２図
（リモートコントロール用接続図）

3.10−1　出力電圧を本機より離れた場所で可変したい場合

接続する抵抗器の抵抗値に対して，ほぼ 5.5 V／kΩ の割合で出力電圧は変化します。すなわち，出力電圧 Vo は

$$\text{出力電圧}\ V_o\,〔\mathrm{V}〕 = \text{電圧変化率}\ 5.5\,\mathrm{V}/\mathrm{k\Omega} \times R_r\,〔\mathrm{k\Omega}〕$$

ここに電圧変化率は 1 kΩ 当り変化する電圧を表わし，Rr はリモートコントロール用の抵抗〔kΩ〕を表わします。

適当な値の抵抗器がなく出力電圧 Vo が定格電圧を越える恐れのある場合や，ある電圧に制限したい時は，その電圧値に近い，漏洩電流の少ない定電圧ダイオードを抵抗器の両端に接続することによって出力電圧を制限することができます。

（第３−１２図参照）

注意：使用する可変抵抗器は温度係数の小さな巻線形，もしくは金属皮膜形を使い少くとも 0.5 W以上の電力損失を有するものを使用して下さい。さもないと，出力電圧の温度ドリフトが悪化する恐れがあります。

注意：外部に接続する線の長さは，約２ｍまで本機は安定に動作します。それ以上長い場合は出力電圧が不安定になることがあります。

3.10−２　分解能を上げたい場合（電圧を細かく調整したい場合）

上述したように，出力電圧は接続する外部の抵抗値に比例した電圧となります。
したがって，必要とする電圧の分解能を V res とすると使用すると抵抗器の分解能 R res は

$$R_{res} = \frac{V_{res}}{\text{電圧変化率 } 5.5\text{V}/\text{k}\Omega} \quad 〔\text{k}\Omega〕$$

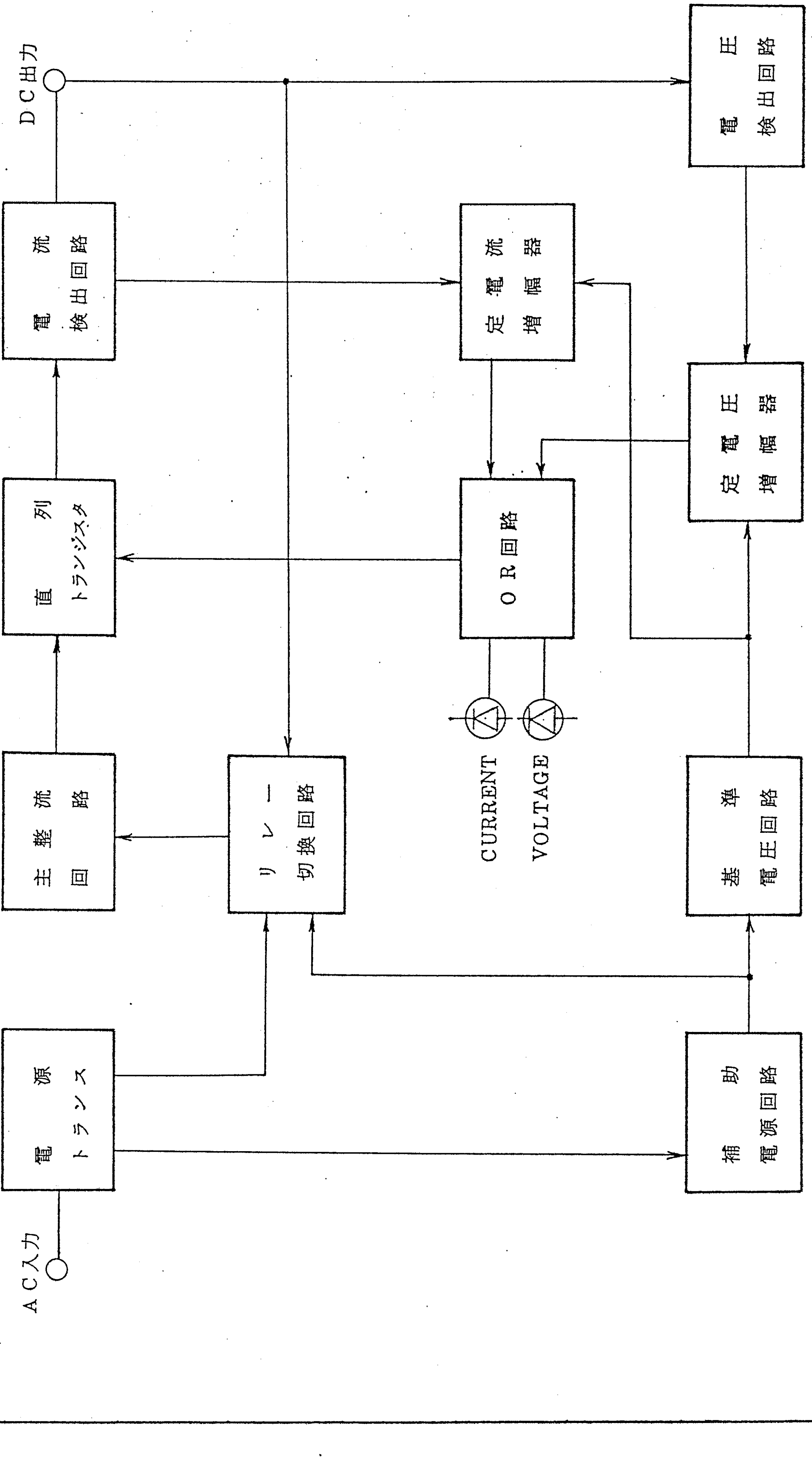
となります。

4. 動作原理

本章では本機の動作原理および回路の詳細な説明をすることにより，本機を良く理解してもらい，正確な取扱い，定期的な保守点検を行なっていただくことを目的とします。

4.1 概要

入力電源はまず電源トランスに入り，動作するのに適当な電圧に変換されます。
一つはリレー切換回路を経て主整流回路で直流に変換され直列トランジスタ群に供給されます。
他方は，補助電源回路を経て基準電圧回路，各増幅器，ランプに供給されます。
定電圧増幅器は，基準電圧と電圧検出回路から検出された出力電圧の検出電圧を比較増幅してＯＲ回路を通して出力電圧が一定になるように直列トランジスタを制御します。
一方，定電流増幅器は基準電圧と電流検出回路より検出された電圧を比較増幅し，ＯＲ回路を通して出力電流が一定になるよう直列トランジスタを制御します。
リレー切換回路は出力電圧に応じて電源トランスの２次巻線を切換えて，直列トランジスタに供給する電圧を切換えます。


DC出力
電流検出回路
直列トランジスタ
主整流回路
電源トランス
AC入力
リレー切換回路
定電流増幅器
OR回路
CURRENT
VOLTAGE
電圧検出回路
定電圧増幅器
基準電圧回路
補助電源回路

第4－1図　ブロックダイヤグラム

4.2 回路の詳細な説明

第４−２図に示されている電圧値は入力電源電圧１００V，無負荷の状態での電圧値であり，図中指定のないものはすべてプラスサンプリング端子からの電圧です。

確度 0.5％ 以上の電圧計で測定します。

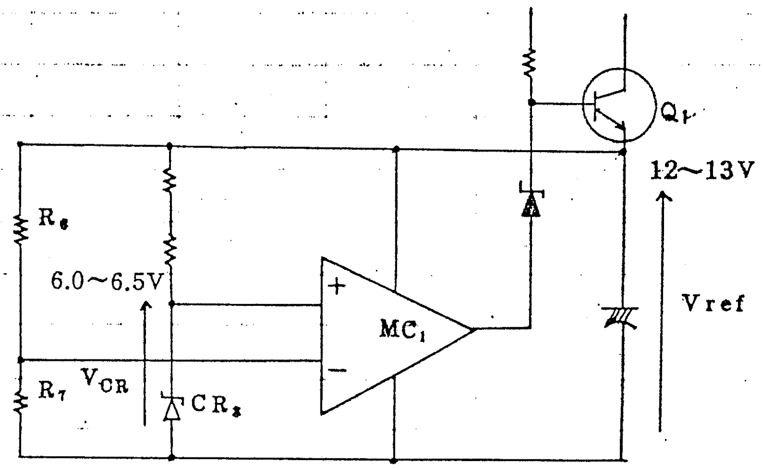
(1) 基準電圧回路

基準電圧回路は，温度補償形定電圧ダイオードCR$_3$で発生した電圧V$_{CR}$と基準の出力電圧をR$_6$，R$_7$で分割してMC$_1$の差動入力端子に加えられます。

MC$_1$は入力端子間の電位差が零になるよう出力電圧を制御しますから，基準出力電圧Vrefは，

$$V_{CR} \times \frac{R_6 + R_7}{R_7} = Vref$$

となります。



第４−２図

(2) 定電圧回路

定電圧回路は汎用 OP アンプ（ 741形 ）で主に構成されています。

OP アンプの反転入力が +S に接続され，非反転入力は基準電圧と出力電圧が分割抵抗 R$_{29}$，RV$_2$（PCB A−001B），R$_5$を通して加えられます。

水電子工業株式会社　取扱説明書様式
記
校正
NP−32635 B　7105100・50 SK 11
作成 年月日
仕様 番号

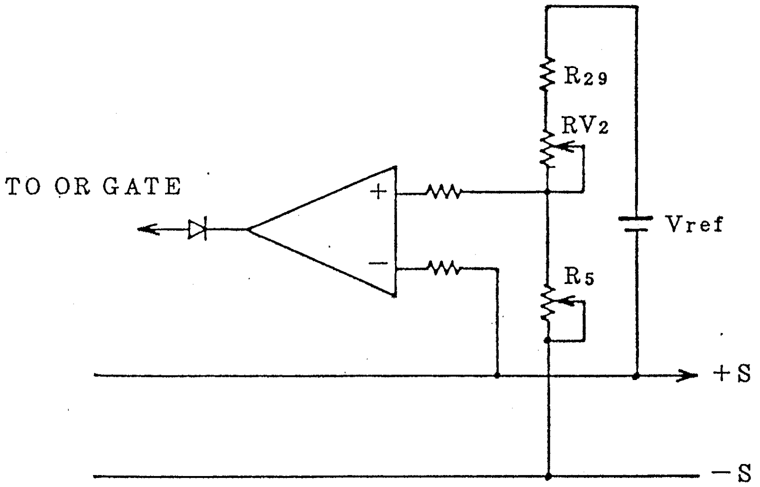
56.6.3

S 7120138

このOPアンプ入力が平衡状態にある時，各入力の電位は等しいことから出力電圧Voは次の関係より決まります。

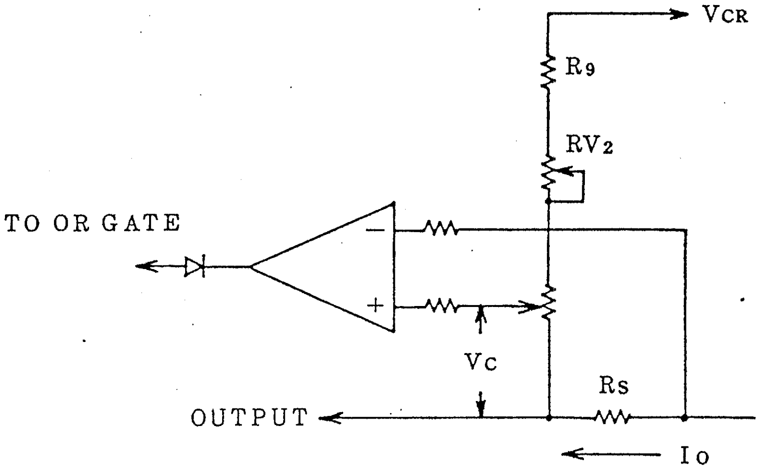
$$\frac{V_{ref}}{V_o} = \frac{R_{29} + RV_2}{R_5} \quad 故に \quad V_o = \frac{R_5}{R_{29} + RV_2} V_{ref}$$

となります。


R29
RV2
TO OR GATE
+
−
Vref
R5
+S
−S

第4−3図

(3)　定電流回路


VCR
R9
RV2
TO OR GATE
−
+
Vc
Rs
OUTPUT
Io

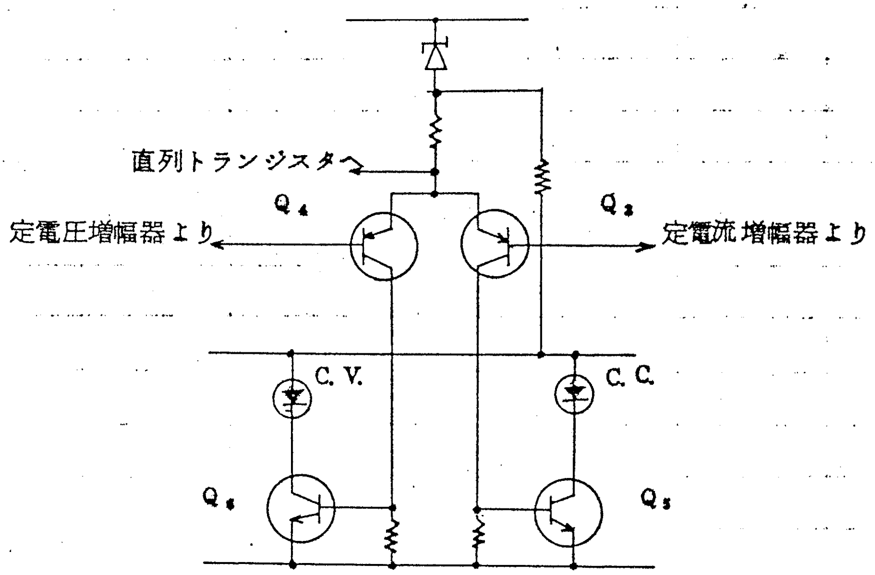
第4−4図

出力電流は電流検出用抵抗 R_S を通り，電圧降下を生じます。この電圧が定電流の基準電圧 V_C より大きくなると MC_2 の出力電圧が降下し，

OR GATE を通して，直列トランジスタを制御し定電流動作に移ります。この時，MC$_3$ の差動入力端子間の電位差はほぼ零になりますから，出力電流 Io は，

$$V_O = R_S \times I_O \quad \text{より} \quad I_O = \frac{V_O}{R_S} \quad \text{となります。}$$

(4)　ＯＲ回路および定電圧・定電流表示回路

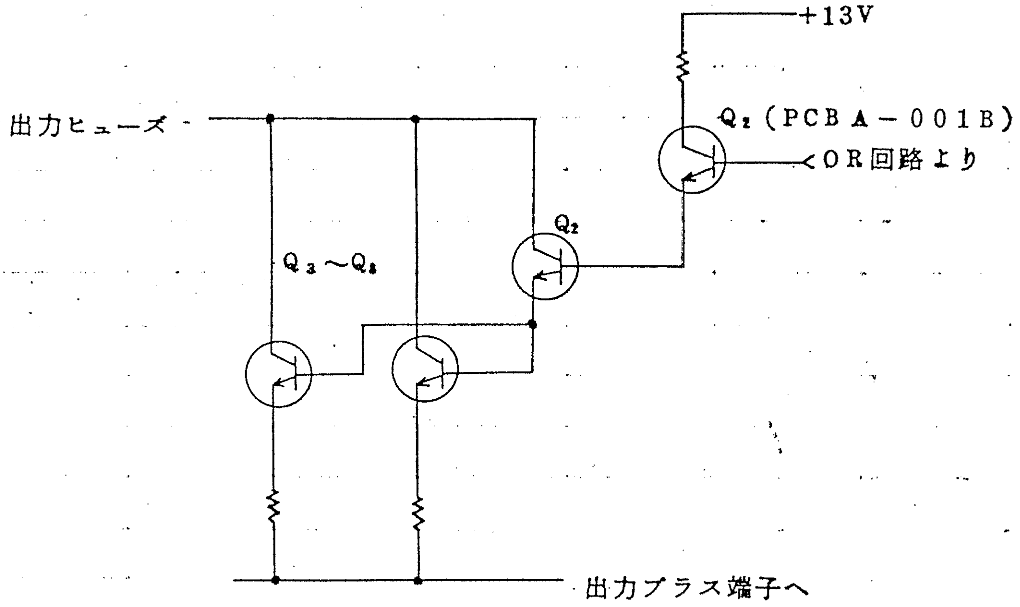


第４－５図

ＯＲ回路は，Q$_3$，Q$_4$で構成されるエミッタ結合増幅器で，そのエミッタから誤差信号を直列トランジスタのベースに供給しています。

定電圧・定電流表示回路は，Q$_6$，Q$_5$のコレクタに発光ダイオードを挿入し，Q$_4$，Q$_3$のコレクタからの信号でQ$_6$，Q$_5$のベースを駆動し発光ダイオードを点灯します。

(5) 直列トランジスタ

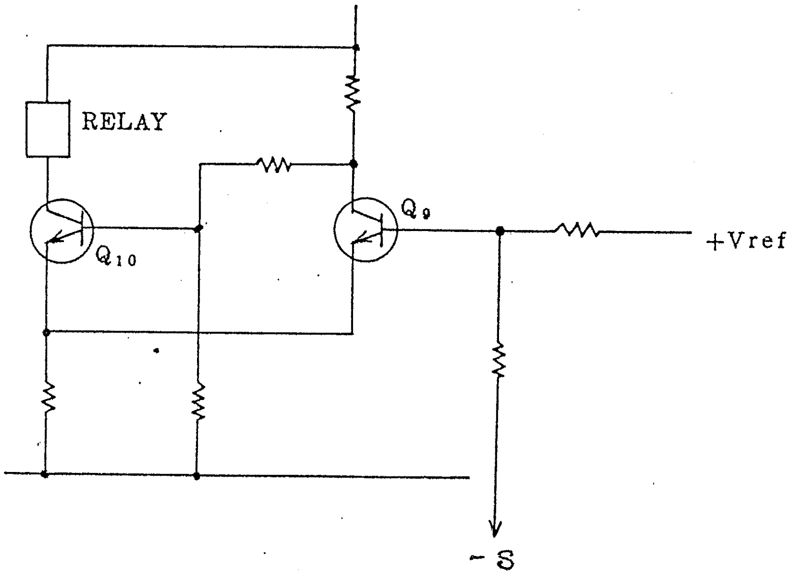

+13V
出力ヒューズ
Q₂（PCBA−001B）
<OR回路より
Q₂
Q₃〜Q₈
出力プラス端子へ

第4−6図

Q_2（PCBA−001B），Q_2〜Q_8 のトランジスタで構成され，ダーリントン並列接続で電流利得を得ています。

作成 年月日 81.6.3
仕様 番号 S712016B

(6) リレー切換回路



第4−7図

リレー切換回路はシュミットトリガ回路で構成されており，一方のコレクタ回路に直接リレーを挿入して動作させています。

シュミットトリガ回路のトリガレベル電圧は約2Vに設計されており，Q_9 のベース電位がトリガレベル電圧に達したときリレーは切換わります。

5. 調　整　要　領

5.1　最大出力電圧の調整

1）VOLTAGE　ツマミを時計方向一杯に回しておきます。

2）OUTPUT スイッチをONにし，出力端子に0.5％以上の確度をもった電圧計を接続します。

3）PCBA－001B上の半固定抵抗器RV_2を廻して，出力電圧が58Vになる様に調整します。

5.2　最大出力電流の調整

1）VOLTAGE ツマミを反時計方向一杯に廻しておきます。

2）CURRENT ツマミを時計方向一杯に廻しておきます。

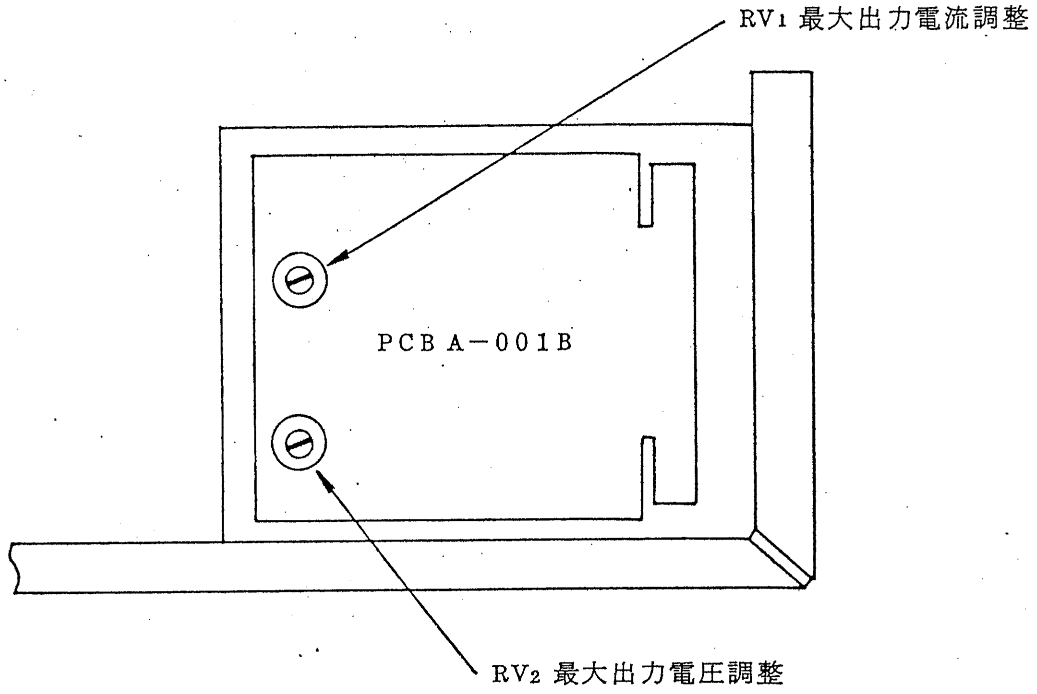
3）出力端子に0.5％以上の確度を持った電流計を接続し，VOLTAGE　ツマミを徐々に上げます。

4）PCBA－001B上の半固定抵抗器RV_1を廻して出力電流が2.1Aになるように調整します。

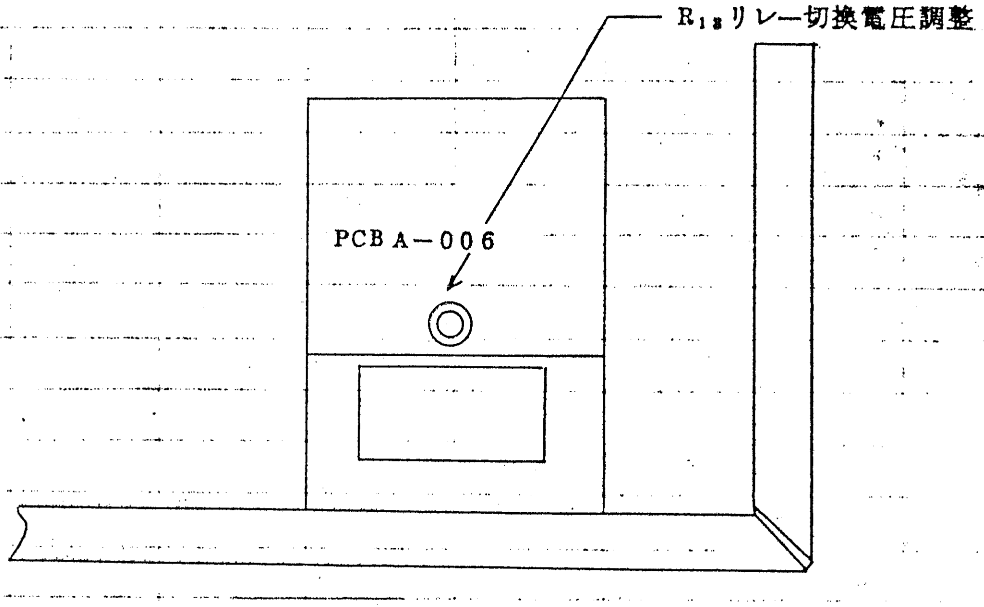
5.3　リレー切換電圧の調整

1）出力電圧を28Vに設定します。

2）PCBA－2上の半固定抵抗器R_{12}を時計方向に廻し切り徐々にもどしリレーが切換わる点にセットします。


RV1 最大出力電流調整
PCB A−001B
RV2 最大出力電圧調整

第5−1図　右側面　PCB A−001B


R12 リレー切換電圧調整
PCB A−006

第5−2図　左側面　PCB A−006

菊水電子工業株式会社　取扱説明書書式
承認
校正
NP−32635 B　710510・50 SK II

作成 年月日 51.6.3
仕様番号 S712019B